九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

関口安義著『評伝長崎太郎』

河内，重雄
九州大学人文科学研究院専門研究員

https://doi.org/10.15017/20350

出版情報：九大日文. 17, pp.85-88, 2011-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

関口安義著『評伝長崎太郎』

河内重雄（KOUCHI Shigeo）

ここ二十年、関口安義氏は芥川龍之介とその同時代の人々の評伝の執筆に取り組まれている。現在刊行されているのは、『評伝豊島与志雄』（昭和六十二年十一月 未来社）、『評伝松岡譲』（平成三年一月 小沢書店）、『評伝成瀬正一』（平成六年八月 日本エディタースクール出版部）、『芥川龍之介とその時代』（平成十一年三月 筑摩書房）、『恒藤恭とその時代』（平成十四年五月 日本エディタースクール出版部）、『悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六』（平成十六年七月 イー・ディー・アイ）。この評伝シリーズに、新たに『評伝長崎太郎』が加わることになった。

長崎太郎（一八九二―一九六九）は芥川龍之介の第一高等学校の同級生で、後年、京都市立美術大学の学長に就任した教育者である。ウィリアム・ブレイクの収集家としても知られている。

『評伝長崎太郎』の目次は以下の通りである。

はじめに　長崎太郎への旅
第一章　故郷と生い立ち
一　高知県安芸市　二　父母と家系
三　小学校と中学校　四　キリスト教との出会い
第二章　一高の青春
一　無試験検定トップ合格　二　学友たち
三　深まる信仰　四　井川恭との交わり
第三章　菊池寛の退学事件
一　菊池寛と佐野文夫　二　事件の新解釈
三　誓言を破る　四　若き太郎の悩み
第四章　佐野文夫のその後
一　悔悟の一夏　二　父の愛
三　大学中退と左傾　四　日本共産党初代委員長
第五章　進路の変更
一　卒業記念旅行　二　京都大学法学部
三　大学自治と佐々木惣一　四　友情と二人の森先生
第六章　ニューヨーク時代
一　結婚と日本郵船入社　二　ニューヨーク支店へ
三　美術館めぐりと古書の収集　四　日本のブレイキアン
第七章　ヨーロッパ視察旅行
一　教育への夢　二　パリへ
三　イタリアの旅　四　美術教育家の素地
第八章　教育界への転身
一　旧制武蔵高校教授に　二　山本良吉と武蔵高校
三　京都大学学生主事に　四　京大事件
第九章　激動の時代の中で
一　東洋美術と短歌　二　弟、長崎次郎の活躍
三　高岡高商校長に就任　四　旧制山口高校長となる
第十章　美術教育者として

一　京都市立美術大学長　二　美術教育者の養成
三　京都美大事件　四　安芸へ帰る
長崎太郎年譜
あとがき
事項索引
人名索引

本書はタイトルに評伝とある。故に、本書単体で、個人史として一般に読まれると考えられる。そして、それは間違いではない。

例えば、昭和十四年に、西田幾多郎の哲学や鈴木大拙の禅学に影響を受けた久松真一や、大徳寺派の宗教人である立花大亀とともに、長崎太郎は参禅の会「真人会」を作っている。その翌年には、土屋文明に師事し作歌を始める。関口氏によると、長崎太郎が同会を作り、作歌を始めたのは、京都帝国大学学生課長の激務を乗り切るため、精神を統一して仕事に当たるためであった。久松真一や立花大亀が参禅の会を作るのは分かる。しかし、中学生の頃からキリスト教やその芸術に深い関わりのある長崎太郎が、キリスト教によってではなく、わざわざこの時期にいわゆる日本的なものに積極的に関わることで精神を静めようとするのは興味深い。

あるいは、京都市立美術大学を去り、最晩年を故郷の高知県安芸市で過ごす長崎太郎が、残された時間をプロテスタントの伝道者・森勝四郎の伝記を書くのに費やしたのも面白い。長崎太郎が伝記を書いてもおかしくない人物は、他にも百島操（ももじまみさお）牧師や終生の師・佐々木惣一など、大勢いるからである。

個人史ということに関して付け加えておくと、本書は長崎太郎の周辺の人達に注目して読んでも、得るものが多い。

例えば、長崎太郎の弟・次郎の出版事業について、第九章で詳しく触れられている。長崎次郎の長崎書店は、昭和期におけるキリスト教関係の書籍の出版について考える時、落とすことができない。クリスチャンの小川正子によるハンセン病患者の救済状況を書いた『救癩手記　小島の春』（昭和十三年十一月）が、二百二十版、二十二万冊を数えるというまさかのベストセラーを記録した時、次郎は沖縄に「癩者」のための寮を寄付するなどしている。あるいは、長崎太郎の第一高等学校の同級生である佐野文夫に関しては、特に一章が割かれており、本書は日本共産党初代委員長の佐野文夫の個人史として読むことも可能である。

しかしながら、このように個人史として本書が単体で読まれることは、関口氏の狙いの一端に過ぎない。このことは、氏が「はじめに」で次のように述べていることからも明らかである（引用文中の傍線は全て引用者による）。

> 芥川龍之介とその周辺の人々を研究対象とし、近代日本の知識人の精神史を考えようとするわたしは、早くからこの人物に光を当てる必要を感じていた。

精神史、つまり、時代精神の一要素として長崎太郎（その思想等）を解し、他の様々な要素と関係付けることで、多様で豊かな流れとして精神を構築すること、そのような精神の産物として芸術を理解すること。このような超越論的な時代精神を構築することが、氏の狙いである。

精神史を考える上でポイントとなるのは、相異なりながら共存する諸要素を、豊かさとしていかに描き出すかということである。氏は『賢治童話を読む』（平成二十年十二月 港の人）で次のように述べている。

> 宮沢賢治と芥川龍之介は、実は同時代を生きた人なのである。（略）この二人の同時代人を比較・対照することは、近代日本を生きた知識人の精神史の解明につながるのではないか。
>
> わたしは芥川をより包括的に捉えるため、その周辺にも光りを当ててきた。そうした研究経歴を経て、日本の近代を把握するには、ほかならぬ賢治と龍之介というまったく異質の二つの個性をぶつけてみるのがよいとの考えが、次第に浮上してきたのである。

つまり、読者が注目すべきは、氏が宮沢賢治と芥川龍之介の類似について述べている箇所よりはむしろ、類似を指摘していない個所、指摘し得ぬ箇所である。そのような観点で『賢治童話を読む』と『芥川龍之介とその時代』を往復しつつ読み、相異なる諸要素の関わり合いを発見する時、時代精神の豊かさが垣間見られる。「まったく異質の二つの個性」ということは、その二つの間に幅があると考えることもできよう。二つの異質な要素の間に、それらをつなぐ要素が見出されることもあろう。ちょうど、右翼と極左（講座派）の間に、議会による民主主義を認める労農派を位置付け、それらを反発し合いつつ共存する要素として捉えるように。

『評伝長崎太郎』の場合は、往復の対象となるのは『芥川龍之介とその時代』だけではない。評伝シリーズがネットワークを形成している。

例えば、氏は『評伝長崎太郎』において、長崎太郎のキリスト教体験に言及する形で、日本におけるキリスト教の多様性を示している。長崎太郎の通った高知県安芸市の安芸教会（プロテスタント）は、カルヴィニズムの信仰告白の立場をとる日本基督教会の牧師により、布教活動がなされてきた。しかし、明治四十一年に同教会に赴任した百島操は、日本基督教会の考え方から次第に離れていく。

百島は大正期、大阪東教会で活動したが、その社会主義的発言から警察当局にマークされていた。また、安芸市には当然のことながら、日本基督教会系以外の牧師もいた。前述の森勝四郎はその一人である。明治四十五年一月、安芸教会で何度か説教をしたことのある森は、森に従う安芸教会の信徒と共に安芸基督教講義所を開設、安芸教会は分裂することになる。つまり、一口に長崎太郎へのキリスト教の影響と言っても、その内容は

実に多様なのである。長崎太郎に限らず、キリスト教の影響云々を言うのであれば、関口氏が行っているように『高知教会創立九十年記念誌』（昭和五十一年三月　日本基督教団高知教会）などを繙き、その地にはどのような教会があったのか、その思想・精神はどのようなものであったのかを詳細に検討する必要がある。

そして、『評伝松岡譲』に目を移すと、同じく大正期、仏教哲学に造詣の深い松岡譲の『法城を護る人々』（全三巻　大正十二年六月―大正十五年五月　第一書房）は、本願寺派の仏教がプロテスタントのキリスト教と相異なりながら時に相似形を描きつつ展開していたことを示している。『評伝長崎太郎』と『評伝松岡譲』を往復する時、多様なキリスト教の思想的土壌と、大正期の新仏教運動の産物として文学作品を捉え直すことが可能となろう。

あるいは、長崎太郎はニューヨークでブレイクなどの版画を数多く手に入れているが、この頃から明治・大正の浮世絵を集めるようになる。長崎太郎はニューヨークの美術商から西洋版画の鑑賞の手解きを受け、アメリカで日本の絵画と出会った訳である。

『芥川龍之介とその時代』に目を移すと、芥川龍之介も長崎太郎同様、西洋画の鑑賞に慣れ親しんでいた。大正期、雑誌『白樺』は積極的に西洋の芸術と鑑賞方法を紹介している。芥川龍之介と同時代の青年達にとって、西洋画とその鑑賞方法は身近なものであり、かえって日本画の方が異質なものに見えることもあったと考えられる。しかしながら、芥川龍之介の場合は、西洋画への親近感だけでなく、「支那」趣味といった要素も考慮する必要がある。芥川龍之介は長崎県で唐画とともに日本画と出会っている。主題やカンバスの有無など、唐画と西洋画とでは鑑賞方法が自ずと異なる。唐画と日本画も当然鑑賞方法は異なるので、長崎太郎と芥川龍之介とでは、日本画と出会うといっても、鑑賞方法など、出会い方が異なると考えられるのである。関口氏の評伝シリーズ間の往復運動により、彼らの日本画との出会い・日本画観は一枚岩ではないことに気付かされる。

最も不毛な精神史は、単一的・直線的で、再構成の余地の無いものである。何を前景化し、問題にするのかに合わせて、様々な形で諸要素を再構成できる豊かさが無ければ、精神史として価値は無い。不毛な精神史にならぬよう、関口氏がとった戦略は、評伝を往復可能なネットワークとして構築することである。氏の評伝シリーズを諸要素の差異に注目して読むことで、精神史的研究の有効性が明らかになる。各評伝の巻末に付された人名・事項の索引は、差異に注目する上での一助となる。

（二〇一〇年十月　日本エディタースクール出版部　三七〇頁　五五〇〇円＋税）

（九州大学人文科学研究院専門研究員）